東海豪雨 紙芝居で伝える

台風から変わった低気圧の影響で、関東や東北は記録的な豪雨となった。茨城・栃木・宮城などで、多くの被害が出ている。まさに「災害列島」日本である。度重なる災害の経験、「災害文化」を足もとからどう継承していくかが重要な課題となっている。

この地域に大きな被害をもたらした東海豪雨から、今年で 15 年経つ。東海豪雨を思い起こしていた時に、表題の中日新聞 9 月 12 日県内版に目がとまった。リードから―死者 10 人、約 7 万棟が浸水した東海豪雨から 11 日で 15 年を迎えた。総世帯の 6 割に当たる 4 千世帯が床上浸水した清須市西枇杷島町で、当時を知らない西枇杷島中学校の生徒らが、被災者の話や当時の写真を基に紙芝居の制作を進めている。「考えられないようなことがあった」「自分たちも伝える側にならないと」―。生徒は地域住民としての自覚を強くしている。

清須・西枇杷島中生徒 地域住民の自覚

東海豪雨 紙芝居で伝える

死者十人、約七万棟が浸水した東海豪雨から十一日で十五年を迎えた。総世帯の六割に当たる四千世帯が床上浸水した清須市西枇杷島町で、当時を知らない西枇杷島中学校の生徒らが、被災者の話や当時の写真を基に紙芝居の制作を進めている。「考えられないようなことがあった」「自分たちも伝える側にならないと」―。生徒は地域住民としての自覚を強くしている。

―朝、目覚めると見慣れた街が泥水でいっぱいになっていた。肩の上まで水が上がり、車は水没していた。赤ちゃんを抱えながら泥水で見えない道を歩くお母さん。避難所では毛布が足りず、住人が連れてきたペットのアレルギーに戸惑う親子もいる。水が引いてみると、街も家もごみだらけになっていた。

西枇杷島中の美術部の生徒十四人は夏休み中の八月、住民から体験談を聞いた。これまで生徒の多くは、家族からも当時のことは詳しくは聞いていなかった。

「朝、起きて辺りの様子が変わっていたら、自分ならどうするだろう」「普段使う教室がドロドロになる様子は想像できない…」。生徒は印象に残ったことを思い思いに描いていった。住民が描いた二枚を加えた十八枚が出来上がり、それぞれの絵は多彩で、それだけで時系列のストーリーができた。

この紙芝居は十月末の学校文化祭で披露される予定。住民らが作った木枠の中で、被災を継承した生徒らの「物語」が始まる。

東海豪雨を伝える紙芝居の絵を描いた生徒たち＝清須市西枇杷島中で

❶「朝目覚めると一面は泥水であふれていた」

❷「水はどんどん増え、車も浸かっていった」

❸「首まで漬かりながら、避難所に向かうお母さん」

❹「赤ちゃんを抱きながらボートで逃げるお母さん」

❺「水が引くと、学校のグラウンドや街は一面ごみでいっぱいになっていた」

西枇杷島中の美術部の生徒 14 人は夏休み中の 8 月、住民から体験談を聞いた。これまで生徒の多くは、家族からも当時のことは詳しくは聞いていなかった。

「朝、起きて辺りの様子が変わっていたら、自分ならどうするだろう」「普段使う教室がドロドロになる様子は想像できない…」。生徒は印象に残ったことを思い思いに描いていった。住民が描いた 2 枚を加えた 18 枚が出来上がり、それぞれの絵は多彩で、それだけで時系列のストーリーができた。

この紙芝居は 10 月末の学校文化祭で披露される予定。住民らが作った木枠の中で、被災を継承した生徒らの「物語」が始まる。

(2015 年 9 月 14 日)